

Profile

映画ソムリエ。雑誌やWebをはじめ、映画公開イベントでのMCとしても活動中。独自視点のレビューが人気で、映画だけでなくカルチャーへの愛が止まらない。

良いことばかりとも言えない世の中ですが、命ある日々の大切さに触れられる美しい映画と出会えました。

人生が終わってしまった人々の前に現れる『とりつくしま』は、「この世に未練はありませんか。あるなら、何かモノになって戻ることができませんよ」と告げる。

人生の本当の最後に、モノと成って大切な人の側で過ごす時間が描かれています。

本作は、東直子氏の小説『とりつくしま』を原作に、娘である東かほりが脚本・監督し製作した映画。おそらく母親の想いを誰よりも理解しているであろう母娘の特別な絆が感じられる作品である点も心に響く。

オムニバス形式で進み、4つの物語それぞれエピソードごとに大切なことに伝えてくれます。夫のお気に入りのマグカップになることにした妻を描いた

人生には『未練』が付きもの。それは、新しい自分に出会う『はじまり』

Vol.3



©ENBUゼミナール

『とりつくしま』

2024年9月6日より
新宿武蔵野館ほか
全国順次ロードショー
配給：ENBUゼミナール
監督・脚本：東かほり
原作：東直子
出演：橋本つむぎ／徳島想史／小川未祐／楠田悠人
磯西真喜／柴田義之／安宅陽子／志村魁／小泉今日子
2024年製作 / 90分 / 日本
<http://toritsukushima.com/>

『トリケラトプス』では、誰もが誰かの代わりになることができないことを。

大好きな青いジャングルジムになった男の子の物語、あおいの『では、公園という人々の交差点でたくさんの人が今は亡き大切な誰かを思い出しながら生きていくことを。

孫にあげたカメラになった祖母の物語『レンズ』では、もう一度この世界をカメラの視点で旅することで木々の木漏れ日やベンチから眺める何気ない景色や

誰かの笑顔など、当たり前の日常がきらめきにあふれていることを。

息子を野球の試合を見守るためロージンになった母の物語『ロージン』では、息子の未来を信じているからこそ潔く去っていきける母の強さを。

モノとなったときに語りかけるセリフが絶妙で、それぞれの生きていた時の人間の輪郭が見えてきて涙を誘う。人は誰でも自分にしかない役を全うし生き

ていることが伝わってきます。そして、悲しいだけの物語になっっていないのが秀逸です。『とりつくしま』は意味合いとしては頼りとしてすぎる場所ですが、死者の未練を描くのではなく、その魂が解放されている様子が描かれています。それゆえ、この地球は愛に触れる場所であると思いが出ることができました。

社会現象にもなった上田慎一郎監督『カメラを止めるな!』をはじめ、ワークシヨップからキャストイングされた新しい才能を育てているENBUゼミナール「シネマプロジェクト」は商業映画とは一線を画す刺激的な映画を生み出し、注目され続けています。

このプロジェクトから誕生した「とりつくしま」にも新たな才能が芽吹いていて、映画業界の未来は明るいと思しながら劇場を後にしました。